



めいさくばなし
こながるめいろ
9月の
おはなし

かぐや姫

昔々、竹を採って暮らしている、おじいさんとおばあさんがいました。

ある日、おじいさんが山でびかぴかと光る竹を見つけました。不思議に思っていると、竹の中に小さな女の子がちよこんと座っているではありませんか。

「なんとかわいい子だろうー!」

おじいさんは女の子を連れて帰り、おばあさんと大切に育てることにしました。

女の子はみるみる大きくなり、美しい娘になりました。

やがて女の子は、「かぐや姫」と呼ばれるようになりました。

かぐや姫のうわさは広がり、かぐや姫をお嫁さんにしたいという若者が続々と屋敷にやって来ました。その中でも、熱心な若者が五人いました。

ところが、かぐや姫は誰とも結婚するつもりはありません。そこで五人の若者それぞれに、手に入れるのが難しい宝物を頼みました。その宝物を持って来た人となら、結婚してもいいと言います。

一人目の若者は、おしゃか様の光る石の鉢。二人目の若者は、ほうらい山という伝説の山にしかない、光る枝。三人目の若者は、中国にあるという火ねずみの皮でできた衣装。四人目の若者は、竜の光る玉。五人目の若者は、つばめが子を産むときに一緒に産むという、特別な子安貝。

しかし、誰も本物の宝物を持って来

ることができず、かぐや姫と結婚することはできませんでした。

かぐや姫のうわさは、この国で一番偉い帝の耳にまで届きました。しかし、帝ですら結婚を断られてしまいます。

何年か経ち、姫は月を眺めて涙を流すようになりました。おじいさんとおばあさんは心配しますが、かぐや姫は理由を言いません。

やがて、十五夜が近づいてきました。かぐや姫はおじいさんとおばあさんに、思い切って話します。

「私は月の者です。明日の満月の夜、空から迎えが参ります。私は月に帰らなければなりません。」

おじいさんとおばあさんは驚き悲しみ、かぐや姫を月に行かせない方法はないかと考え、帝に相談しました。

いよいよ、空から迎えが来る夜になりました。屋根の上では、帝の家来たちが弓を持ち、矢を放とうとしていました。

次第に空が光り、天女たちが姫を迎えにやってきました。帝の家来たちはなぜか力が抜けて、矢を放つことができず、

姫はおじいさんとおばあさんに、お別れをします。

「長い間、お世話になりました。これから月へ帰ります。どうかお元気でいてください。」

そう言うと、かぐや姫は空高く昇って行ってしまいました。

(おしまい)